

新学習指導要領スタート特集

シリーズ①

何が 変わる!?

各教科等の 特質に応じた 「見方・考え方」 とは?

早分かり **秘**
カンタン解説

奈須が斬る!



奈須 正裕 上智大学教授 / 教育課程部委員

【奈須先生からの豆知識】

「見方・考え方」の英語訳：

a discipline-based epistemological approach

→特定の学問を基盤とした認識論的アプローチ

であるならば、それをしっかりと子どもたちに体得できるようにすべきですね。

一新された目標の書きぶり

新学習指導要領では、各教科等の目標の書きぶりが一新されました。多くの各教科等でその冒頭に出てくるのが、「見方・考え方」です。今後の学習指導では、子どもがその教科等の「見方・考え方」を適切に働かせながら取り組む学習活動を通して、資質・能力を豊かに、また着実に育成することが求められているのです。

【資料1参照】

各教科等の対象と方法

「この教科は何をするのですか」と尋ねると、理科なら「自然の事物・現象を扱う」、国語科なら「文字や言葉、文や文章について必要な事項を教える」といった答えが返ってきそうです。しかし、各教科等は取り扱う対象や領域と共に、それらにどうアプローチするか、つまり知識や価値や美の生成方法によっても特徴づけられます。

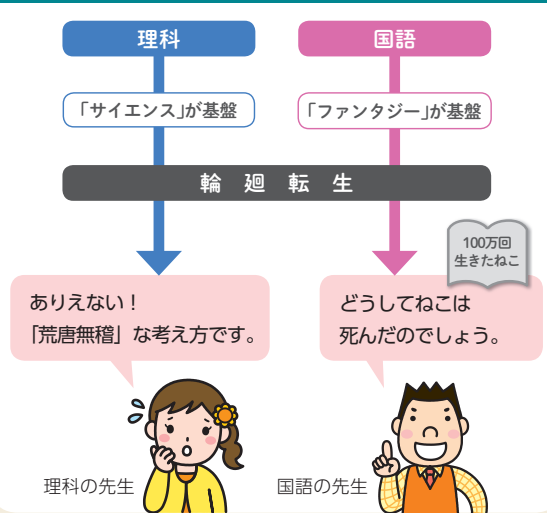
たとえば、理科は自然の事物・現象を対象としますが、輪廻転生は教えません。「輪廻転生は間違いだから」と近代科学主義なり実証主義という認識論的立場に立つ理科教師は言いたいです。しかし、哲学や宗教、文学や芸術から見れば、輪廻転生というアイデアには大きな可能性があり、現にそれに依拠して美的創造を成し遂げ、あるいは幸せな人生を送った人は膨大な数に上ります。【資料2参照】

資料1 書きぶりが変わった各教科等の目標

〈目標の表現は、下記の4文構成に〉

- ① ○○な見方・考え方を働かせ、△△な活動を（行うことを）通して、□□の資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
見方・考え方
- ② 知識及び技能
- ③ 思考力、判断力、表現力等
- ④ 学びに向かう力、人間性等
資質・能力の3つの柱

資料2 「見方・考え方」は、その教科等ならではのアプローチ（例）

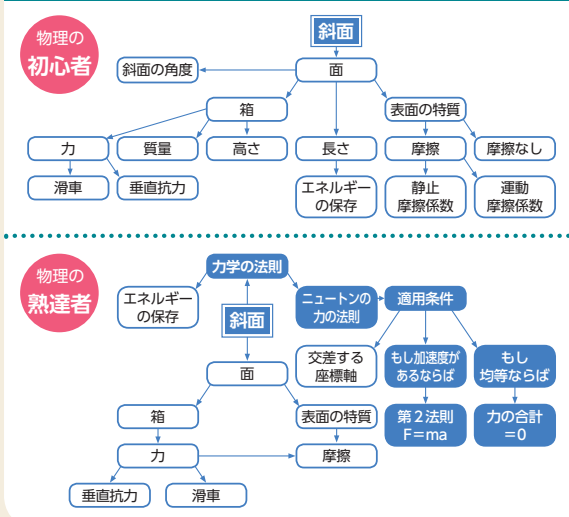


*理科なら科学、算数なら数学といった、その教科等の「親学問」の方法論があります。

各教科等には、知識や価値や美を生み出す独自にして根拠のある方法論があります。学校や教師には、個別的な知識や技能を教える中で、それら「見方・考え方」をも子どもに感得させ、自在に使いこなせるように鍛え上げることが期待されているのです。

各教科等の「見方・考え方」は、その教科等が主に取り扱う対象に対し、現状においてもっとも適切なものが選択され、体系化されています。この対象適合的な「見方・考え方」を働かせて個別・具体的な対象にアプローチするからこそ、それに見合った「思考力、判断力、表現力等」や「学びに向かう力、人間性等」が培われ、「知識及び技能」もまた、適切且つ着実に習得できるのです。

資料3 「見方・考え方」の洗練に伴う知識構造の変化



鋭角的な学びと間口の広い学び

さらに、「各教科等で育まれた力を、当該教科等における文脈以外の、実社会の様々な場面で活用できる汎用的な能力に更に育てたり、教科等横断的に育む資質・能力の育成につなげたりしていくためには、学んだことを、教科等の枠を越えて活用していく場面が必要」となってきます（2016年12月中央教育審議会答申32頁）。

小学校の場合、「教科等の枠を越えて活用していく場面」としてもっとも有望なのは、総合的な学習の時間と特別活動でしょう。これら教科等横断的な探究が求められる場においては、どの方法が使えるのかがあらかじめ見えていません。しかし、だからこそ子どもたちは各教科等の学習で働かせてきた「見方・考え方」という問題解決の「道具」の数々を自覚し、整理して俯瞰的に眺め、どれがどんな理由でどの問題状況に適合するかを考え、現に試し、その有効性や留意点を深く実感していきます。【資料4参照】

「見方・考え方」に沿った知識の構造化

「見方・考え方」が鍛えられるとは、具体的にどのようなことでしょうか。参考となるものに、熟達化研究があります。たとえば、物理の熟達者（物理の博士号取得者）と初心者（学部学生）が斜面を物体が滑り降りる問題を解くのに用いる知識は、要素の数では違いはないものの、構造化の仕方によって決定的な違いがありました。【資料3参照】

初心者はまず、斜面の角度や長さなどの表面的特徴を連想し、最後にようやくニュートンの法則やエネルギー保存のことを考えていました。一方、熟達者はいきなり必要な物理の法則を想起し、次に法則の適用条件に思いを巡らせ、最後に斜面の表面的特徴へと意識を向けていたのです。

熟達者は物理学の学問構造に近似した知識を所有しており、それが世界を単なる物質の集まりではなく、物理法則によって支配されるシステムと見るよう促しています。

このように、教科等を学ぶとは単に知識の量が増えるだけでなく、知識の構造化の仕方が、その教科等ならではの「見方・考え方」に沿った方向へと組み変わり、洗練されていくことです。そしてその結果、子どもたちは世界をこれまでとはまったく違ったように眺め、関わったり取り扱ったりすることができるようになるのです。

そのためにも、まずは各教科等において「見方・考え方」をしっかりと意識した指導の実施が望まれます。

資料4 教科等の枠を超えて「見方・考え方」を働かせる

総合的な学習の時間	特別活動
→探究的な見方・考え方	→集団や社会の形成者としての見方・考え方
各教科等における見方・考え方を総合的に働かせて、広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、実社会や実生活の文脈や自己の生き方と関連付けて問い続けること	各教科等における見方・考え方を総合的に働かせて、集団や社会における問題を捉え、よりよい人間関係の形成や集団生活の構築や社会への参画及び自己の実現に関連付けること

このように、対象適合的な「見方・考え方」を鋭角的に鍛え上げていく各教科等と、それらを間口の広い対象に適用する中で、教科等の枠組みを超えて「見方・考え方」を整理・統合し、ついには自家菜籠中のものとする教科等横断的な学びとが、各学校の教育課程の中で豊かなハーモニーを奏でよう工夫することが、これからの学校と教師には求められているのです。